



前世で不遇すぎたおっさん、
女神に憐れまれてチート貰ったので
好き旧生きてみる

ZENSE DE FUGU SUGITA OSSAN, MEGAMI NI
AWAREMARETE CHEAT MORATTA NODE
SUKI NI IKITE MIRU

著 紫樓 Shirou

ill. ほろば夏弥

登場人物紹介

ドット

冒険者パーティ〈新月の雷光〉の拳士。かなりの大男で豪快な性格。

ランガ

冒険者パーティ〈鋼鉄の拳〉の拳士。リーダーを務める。

ヴェール

とある世界を管理する神の一柱。火と鍛冶を司る。

プティ

冒険者ギルドの受付嬢でウサギ獣人。冒険者のいろはをやさしく教えてくれる。

ボルク

宿屋〈小鳥の止まり木〉の主人。腕がいい料理人で、虜になる客が多い。

ドリアス

とある世界を管理する神の一柱。創造を司る。

ジエイル

不遇な四十二年を過ごした、しがないサラリーマン。異世界転生の際に、沢山のチートと理想の容姿を手に入れ、第二の人生を楽しもうと歩き出す。

とある世界を管理する神の一柱。徒と契約を司る。

序章

人生初の彼女は、かなりグイグイくるアクティブな女性だつた。ちよつと引きはしたものの、これを逃すと二度と彼女ができるないと思つて、交際を続けていた。いつの間にやら外堀が埋まつていて、流されつつも、そんなこともアリかと結婚を決めた。彼女、アンナはとにかく派手好きで、今どき派手な結婚式をしたいとか言って、ちよつとめんどくさかつた。

俺も長く親を心配させたことだし……親族にやつといい報告ができるという親の思惑も受け入れて、迎えた披露宴の最終打ち合わせを兼ねたデートの帰り。

「うつふふ！ ドレスはぜんぶ可愛い。四着も選ばせてくれてありがとう」

「全部似合つてたよ」

正直言つて、どのドレスも似たり寄つたりで大差ないと思つたが、金で機嫌きげんが取れるならいいかと流す。

俺の趣味は、ネットゲームとネット小説。

それとたまにいい酒を買うこと。

中小企業ながら、勤続二十年。この前やつと課長になつたところだ。アクティブな趣味がなかつ

たので、金もそう使う機会がなく……

貯まっていた金をなんとなく同僚に勧められた株に突っ込んだところ、小金持ち。

懐も潤っていることだし、ケチケチしてキーキー言われるよりは、ドレスくらいつて思つたら、

全部オーダーメイドだった。

披露宴が終わつたら二度と着ないのに……え、着ないよな？

新婚旅行はアンナの好きにしてと任せたら、パリとイタリアだと。

別に記念の旅行に大金を使うのはいいのだけれど、後先（老後）とか考えてないんだなーと、若干早まつたという後悔をしたところで、すでに披露宴間近。

俺、一ノ瀬成。四十二歳。彼女は、鷺見アンナ。二十八歳。

そりやこの歳の差で浮かれた俺がバカだった。地味で特に長所がない中年にグイグイくる女がいるわけねえか。

ちなみに、未だ手を出してない。

「結婚するまではあ、できないのぉ」

二十八でこんなに派手で遊んでいる風なのに、そんなわけあるか、とは思つてた。ただ、それに至るまで口説くのが面倒だつた。

ツレに「そんなんでよく結婚決めたな」って言われてしまつた。

全くもつてその通りだが、なんとなく流れに身を任せちゃつたんだよ。

ちょうど昇進で忙しかつたし。

タクシーを見つけて止めようとした時、彼女の足元が急に光つた。ちなみに、夜の繁華街。

彼女の近くには夜遊び中の若者たちもいる。彼女も含めて、まとめて光つている円に吸い込まれそうになつてゐる。

「アンナ!?

「え、なあにい？」

「キヤア！」

「わあ！」

彼女の名を呼び、慌てて手を彼女に向けて伸ばすが、今度は俺に横から光が当たる。

あ、さつきの光にやられてバスや他の車が制御を失つた感じ!?

「離れろ!!」

俺に向かつて、通行人の野太い声が飛んでくる。

「危ない!!」

「離れろ!!」

彼女の名を呼び、慌てて手を彼女に向けて伸ばすが、今度は俺に横から光が当たる。

「わあ――――!!」

ブツブツ——!! ガツシャーン!!
キキキイ——!! ブアーン!!

——マジか？ 僕死ぬわ。

「あー、起きてくれない？」

んー、今日は休みだ。もう少し。

「残念だけど、もう休みとかないから」

はあ？ 休みはあるわ。無休で働けるかつての。

俺の職場はブラックさも感じるが、一応はホワイトだぞ。

有給だつて使わずに残してあるから。新婚旅行で消えるけど……

「あ、もう新婚旅行も行けないから」

なんだつて？

「とりあえず起きなさいつて」

うるさいなあ。

ん？ 僕の部屋、こんなに明るかつたつけ？

「お前の部屋でもないのだけれど」

ん？ ん？

手元を見ても、天井を見ても、真っ白なだけで何もない。

そして目の前には、足を組んで氣怠げに俺を見ている美女がいた。

「ふうん、美的センスはいいじゃない。なんであんな子に引っかかったのかしら？」

呆れ顔の美女、浮いてる。足を組んでいるけど、何に座っているんだ？ 空氣椅子？

「どうでもいいことが気になるんだね。ここには物質の概念なんてないよ」

おー！ そうなんだ……つて、その前にここはどこだ？

て、そもそも、俺つて口に出して話していたつけ？

「私はティアランシア。おきとたまし契約の女神よ。そして、ここは神の領域……お前は今、地球で言うところの魂の状態。私と話ができるのは、会話ではなく念話のような感じね」

思考が筒抜けつぬつてこと？ ……やめてほしい。

「……まずお前、死んだのは理解していないの？」

あ、俺あの時死んだのか。そうか。

「さほど驚いてないわね。未練がないのかしら？」

驚いてはいるけど、トラックに轢かれたっぽいから、そりや死ぬわって思つて。

「未練……」

んー、親より先に逝つて悪いとか、仕事引き継いでないとか、あとPCの履歴とか昔の同人誌とエロ本とか……

死んじやつたならもういいかな。目の前で見られないなら、恥ずかしいとか感じないからなあ。「あつさりね。以前、他の星に転生することになつたやつらは、ＰＣは破壊してくれとか、貯金がーとか、地図のかけらを見つけられなかつたとか騒いだそうよ」

あー、ご愁傷様しゃうじょうようだ。

「もつと前に来たやつは七つの玉だとか、銀のタマとか、未知の食材がどうとか言つていたわね」

「やつとね。お前は本当であれば、まだ死ぬ時期ではなかつたのに、不幸にもある現象に巻き込まれてしまつたの」

「何に巻き込まれたのだろうか？」

「そういえば、アンナと若者たちはどうなつたんだろ。」

「お前、仮にも結婚するつもりだつた相手に淡白たんぱくだねえ」

「だつて、なんかグイグイ来たー！ 外堀埋められてるー！ なんて感じで……彼女ができたこと、両親が喜んでくれたことは嬉しかつたのだけれど、好きだの愛してるだの、そんな思いが育つ前だつたから。」

「そうねえ、お前の彼女、アンナだつけ？ あの子すく図太ずぶいっていうかねえ？ あの光は近くにいた若い子たちが、とある世界に召喚された魔法によるもので、彼女も巻き込まれただけなのよ」

「ん？ 全く話が理解できない。」

「お前の彼女、一応、召喚された世界に行く前に、私みたいな担当がこういう空間に呼んだけど、説明の途中でなぜか喜びだして、召喚した世界にウキウキで行つたそよ」

「話の途中でね。あいつ、人の話を聞かないんだよな。普段から、自分の希望が叶つて当たり前だと思い込んでて、叶わないとなるとうるさいから。」

「あー、だから妥協だいきゅうしちやつたの？」

女神は、心底呆れているような顔で話を続ける。

「まあ、死ぬ予定ではなかつたのに死んでしまつたお前が可哀想かわいそうだからね。本来は召喚魔法おこなを行つた星の担当者が補償すべきなんだけど、今回は特別に私が意見を聞いてあげることにしたの」

「はー!? 巻き添えにしたやつに罰はないのか。納得がいかない。」

「そもそも、ネット小説やアニメで流行りの召喚つて、誘拐よひかとかの犯罪じゃないか。」

「犯罪ね。法と捷はそれぞれの星や国で基準が違うから難しいところなんだけど、お前のいた世界では犯罪ね」

「そうだぞ。」

「とはいえ、地球上かみに還かえしてあげたくとも、お前の肉体はミニンチなのよ。消滅しかない魂に返還かへんのための余分な神力じんりょくは使いたくない」

「要するにめんどくさいってことだよな。オブラーートに包んで、もつとわからないようにしてく

え、俺の魂、消えるのか？

「それに、お前は召喚魔法に中途半端に巻き込まれて次元を超えてしまったから、地球に魂を戻しても戻るべき道に戻れないの」

それ、やっぱり召喚魔法を使つたやつにペナルティつけて！

「まあ、あのアンナだからが混ざつただけで、結構な罰だろうさ」

・・・・・

「あのアンナは、元彼というのか？」とは別れずに『あはー！　パチンカスだけど顔とアツチは最高だからお取り置きい！　結婚相手は顔はブスだけど、口うるさくないしい、お金持つてのから妥協なの！　何しても許してくれるお財布ゲットお！　アタシか・し・こ・いい☆　うふ』などと言う阿婆擦れで、あのまま結婚していたら性病をうつされたあげく、貯金を全部吸い取られて、托卵されていたわよ」

だからオブラーートを……

つて、なんなの!?　そのネットマンガとSNSのツブヤイタに出てくるサレとかザマアフルコンボな未来。

しかも声真似うま!!　何その無駄なクオリティ!

「お前、女運なくて諦めきつていたにしても、最大凶を引くとは……」

イヤー!!

俺のライフはもうゼロよ！

「本当に稀に見る気の毒な男ね」

さらにダメ押し――――!

「お前、アンナと同じ世界に行きたい?」

「嫌デース!」

ニューヨークに行きたいかー!!　のアメリカを横断するクイズ番組みたいなノリで何を言うのさ。

「ならば、気の毒な四十二歳の童貞よ」

イヤア――――!

「気の毒すぎて涙が出るから、私たちの受け持つてているうちの世界の一つで、望む人生をくれてやろう」

望む人生?　私たち?　神が複数いるのか?

「ええ!　お前のいた世界ではチートと言うのだったかしら?　魔法や見てくれ、あと持ち物も。

お前はなんとも不器用で哀れすぎるから、大サービスしてやるわ」

なんなの、貶して落として持ち上げるみたいなこの感じ。

ボッコボコのフルボッコの後に、餌吊り下げてくるの。

そう告げた目の前の美女は、最初は氣怠そだつたのに、今は楽しげにしている。

「チートに、見た目……」

ええ?　好きなものが手に入つて、理想の見てくれになれるの?

何か落とし穴がありそうだ。怖いぞ。しつかり聞いてから決めよう。

「まず……その世界はどんな世界だ？」

原始時代とか未来世界とか、極端に環境が違う世界では生きていける気がしない。

「そうねえ。ちょっとお前の記憶を覗かせてもらうわよ」

女神が俺の方に指先を向けると、なんとなく頭に違和感を覚えた。

「そう……そうね。中世ヨーロッパ？ くらいで剣と魔法の世界って言えばわかるのね？」

あ、異世界転生系小説で、よくあるやつですね。
「魔物は出るけど魔王はいない。身分差は国によつてマチマチ。冒險者になれば国の移動は自由ね」

「ほうほう。なんとか俺でも生きていける世界かな？」

それなら、まずは外見を好みにしたいな。

「えーと、まず見た目は、カッコよく……」

若いうちはあの洋画の海賊のキャプテンとか、吸血鬼役の時の……

あ、最終的には渋いヒーロー役のイケオジ俳優……いやいや待てよ。

何も外国攻めじゃなくともいいかな。

スタント学校出身の国際的俳優……濃い顔イケメンの特撮俳優、任侠系に出てた渋オジ。いや待て。ここは、ビジュアル系バンドのボーカルのような……美しい男もありだ。

憧れのスターにだつてなれる機会だ。なりたい顔が多すぎて選べない。

「ちょっとイメージが多すぎてわからないわ」

「待つて！ 若いうちは綺麗で、歳を取つたら渋いオジになりたいんだ」

好きな顔になれるつて言われたら、推しの顔になりたいに決まつている！

「お前、アンナには言いなりだつたのに、いきなり自己主張が強くなつたわね」

そりやね。アンナは、否定すると暴れてしまい、黙つた方が早く収まるのだから。

「怖いわ！ 洗脳みたいでやだねえ」

とにかく、せつかく自分の理想を叶えられるなら、厨二^{ちゅうに}と言われようが、憧れを目一杯に詰めたい。

「本当に哀れな子ねえ」

うーん。歌声は……高音出せてファルセットがうまい彼か、ハードロックのフェイクがかっこいいあの人か……

「なあに？ 歌もうまくなりたいの？」

歌、音楽は大事だ。日々の生活に潤い……異世界には俺の推したちの素晴らしい音楽も、ストレス解消に必須なカラオケもないだろう。うおー。それはつらいぞ。

「ふうん？ 音楽……カラオケ？ ……お前のいた世界は面白いのね」

あ、また記憶を覗かれてますか。そうですか。

「うん、だいたいの好みはわかつたよ。見てくれば私が決めてあげるわ」
まさかの時間切れ！？ 聞いてないよ！

「で、チートは？ 何が欲しいの？」

あ、これはとても大事なやつだ。異世界転生系小説の知識を総動員するべき時だ。

「まず無限収納むげんしゅうのうと転移てんい。言語に困らない……剣と魔法はある程度使えるか会得しやすい。あと銃とバイクが欲しい」

リアルでサバゲーやツーリングをやつてみたかったけど、時間がなくてできなかつたから付けてもらおう。いや、時間はあつたけど、休みは寝たかったのだから仕方ない。

「銃にバイクウ？」

うわあ、すごい渋面じゅうめん。無理か？ 望みすぎたか？

徒步移動は絶対に嫌だぞ。

目立つてしまふなら、バイクは人が少ない場所で乗るから。

「まあいいわ、道具系はメンテナンスがいるだろうから、鍊金術れんきんじゅつも使えた方がいいわね」

え、剣と魔法が使える上に鍊金術れんきんじゅつ！？

「あとは？」

あ！ 酒とタバコと調味料と……

それと、ファストフードやコーラとかジャンキーなものがないと、中毒症状ちゅうとうじょうじやうが出る気がする。

「タバコ？ データには好んでたとは書いてないけど？」

女神が手に持つた紙のようなものを見て言つてくる。

タバコは、世界中のあらゆる種類を試してみたいという時期があつた。でも、会社は禁煙きんえんだしあちこちで制限があるから、二十代でやめたんだ。

本当は、葉巻はまきもキセルも、なんでも好きだ。

「それはお前のいた世界から取り寄せたいってこと？」

「できるなら……」

できないなら、自分で作れるようにしてほしいぞ。

「フーン？ 私の世界にはあまり種類がない。取り寄せね。酒もかしら？」

酒は絶対外せない！ それこそ美味しいのが飲みたいから!!

「……私にも地球の品物をいろいろ捧げてくれるのなら、その希望叶えてもいいわよ」

お、あなたもお好きですか？

「もちろん捧げますとも」

異世界で、タバコと酒が手に入るなら、そのくらいお安い御用ごようだ。

おお！ 神よ！

「お前の地球での持ち物は、無限収納に入れてやるわ。スマホとタブレットとやらで、お取り寄せと電子辞書、記録してあつた音楽だけ使える」

音楽が聴けるのか！ CDで残してあつたものは、かなり古いものと、アニソンくらいだが、まあいいか？

新しいのはサブスクで聴いていたからな。

ん？ 地球での持ち物つてなんだ？

「露出の激しい女の書とか、数字がいっぱいの紙や家具、家財などよ」
「なんで露出激しいのから出てくるの。真面目なビジネス書もあつたよね？ それから数字いっぱいの紙つてなんだ。新聞の株ページか？ 競馬新聞かレシートとかか？ あ、通帳かも。」
「あと金ね。向こうの財産をこちらの通貨にして収納してある」
至れり尽くせり！

「あ！ 服は!?」

「ん？」

「服はどうなりますか？」

低姿勢で聞いちゃう。全裸で放り出されたくないから。

「なあに？ 希望があるの？」

「んー、周りから浮かない方がいいだろうけど、ビジュアル系バンドっぽい感じがいい。いや、冒險者には向かないかな？」

「……〈創造魔法〉を付けてやるから、自分で作りなさい。だけど、周囲から浮きすぎないよう！」

あ、俺の希望が多すぎてめんどくさくなつたんだな。周囲から浮かない服装つてどんな感じんだろう。

「もう満足？」

正直に言うと、わからない。何が必要なのかなんてまつたくもつてわからないし。

「足りないものは〈創造魔法〉で作ればいいでしょ」

「そうだ！」

「あ、でもあと一つ。初期装備はください」

さすがに装備ゼロで、森の中とかに転生しましたじや笑えない。

「めんどくさいな！ 今！ ここで！ 欲しいものを自分で想像して装備しろ!!」

キレたよこの女神。短気だなあ。

仕方ないので、好きだったファンタジー小説や映画を思い出して、ブーツ、シャツにパンツ、ジャケット……

無限収納がバレないようにウエストバッグ……おしゃれなものはシザーバッグっていうのだけ？ 必死に想像力を働かせて作つていく。

なんとか満足のいく衣服と装備を整えた。

女神がなんとも言えない顔で俺を見ているが、ダメ出しはないので、大丈夫つてことだろう。……つて、まず見た目どうなつた。

早速、自分の顔を確認するために、手鏡を〈創造魔法〉で作つてみた。

「まだいじつていないわよ。見た目は向こうに着いてからのお楽しみ」

ちよつと!!

浮かれた中年が、素でコスプレしてる状態つて!!

あんた！ 最後まで俺を弄んだな。向こうに着いてから酷い見た目だつたりしたら、キレるぞ。

そんなことになつたら、もう変えられないだろうし、死ねるんだけど…。
「まあまあ。ちゃんとお前好みにしてあげるよ」

絶対だぞ！

そうして俺は、未知の世界に行くことになつた。

「向こうでは、ちゃんと私を^{あが}ため^{たま}奉るんだよ」

そうは言われたものの、崇めてほしいなら、召喚術を使った世界の相手に絶対にペナルティつけてくれよー！

捷と契約の女神ならば、なんかすごい罰を与えるられるだろう！

◇ ◇ ◇ ◇

「ティアー、随^{ずい}分^{ぶん}大盤振る舞いだつたじゃん」

「そうでもない」

あの子が去つてすぐ、私の名を呼びながら、ちょっとと面倒な^{めいとうな}神が姿を現した。

「なになにく？ うわ。可哀想」

創造神ドリアス。彼は私の持つていた一ノ瀬成の情報を覗き込んで、眉をハの字にした。

「どうでしよう……」

一ノ瀬成。四十一歳、独身。

過去、幾度かいい縁に巡り合つてたが、周りの悪意で断ち切られる。

姉の友の妨害、大学での親友の裏切り、会社の同僚の妬みなどで、いい縁の相手と話すことがなかつた。

器量は普通。性格は寛容。逆に無関心になる部分もあり、人付き合つてが成立してく。仕事面では上司に恵まれず。残業、休日出勤、クレーム対応を押し付けられ、部下のノースもカバー。その影響で出世が遅れた。

「うわー、周りが敵だらけ」

「上司に恵まれないのって、本当に辛いわねえ」「思わず、目の前の能天気^{のうてんき}そつな顔を見てしまつ。

「えーーー！」

今回のことの始まりは、目の前にいるドリアスだ。私たちは多くの世界を管理していく、ドリアスは気まぐれに世界に干渉する悪癖^{あくべき}があるので、私や他の神は、尻ぬぐいに奔走する羽田になる。とても迷惑な神だ。

「他の世界の者を犠牲^{ぎせき}にする召喚魔法を教えたのは誰？」

「えーーー！ でもね、たまに新しい者を招く方が世界が成長するんだよ」

ふよんふよんと身体を安定させないまま浮いているドリアスが、成が「最初の捧げ物」とお取り

寄せで貰い物をして、置いていった酒とタバコに目を付ける。

「あげないよ」

「ええ——」

「ドリアスも他の世界に召喚された者たちから捧げものを貰えぱいいだろう」

「私たちはいくつかの世界を担当してて、その中にはあの子の婚約者が転移した世界もある。

「元いた世界の品物を手に入れられる能力を持った子なんて、いないんだもん」

そう、神々の約定で、召喚魔法で呼ばれた者には役割に合わせたスキルの他に、ほんの少しうらいしか恩恵を与えるれない。

だけど、巻き込まれた今回は特例。

そこで私は、あの子に欲しいスキルを好きに考えさせた。自分では他の世界の物は手に入れられないけど、仲介役が入るとなぜかできるのよね。

あの子が美容品と言つてくれなかつたのは、少し残念だつたけれど、酒とタバコは嬉しい。シユボツ。

「ふー」

細長いタバコ。私の世界にあるものと全く違つて香りがいい。

落ち着くわー。甘い香りがしてい。

「いーなー」

ちなみに私が成に与えたスキルは、ドリアスや他の神たちの持つ^{けんぱん}機能を少しずつ分けたものだ。

〈創造魔法〉はドリアスの機能。

「欲しかつたらあの子に何かじしんとして、崇め奉つてもりいえば?」

「それだつ」

ドリアスは悪いやつではないけれど、仕事はサボるし、面倒くさい問題を頻繁に起こそ。私は度々その^{ちよつて}調停に入らなくちゃならない……

いつでも、思いつきで動くから。

さて。

あの子の記憶から貰つた、音楽でも楽しもつかな。

違う世界のものに触れるのも勉強になるからね。

あらー この歌カッコいいわねえ!

一章 始まりの町

女神とさよならして降り立ったのは、大きめな街道沿いから少し離れたところにある岩陰。転移が失敗して森の中とかにならなくて、本当によかつた。

しばらくは岩陰から、街道沿いを歩く人々を見てみると、漫画とかで見たような、いかにもな異世界だ。

そういえば、人前に出る前に、自分の見た目をチェックせねば。俺はハンドミラーをバッグから取り出して。

ワクワクドキドキの時間だ。

「なつ!?」

俺、この世のものじやないイケメンになつてる!!

推しイケメンたちの纖細さ、アンニュイさ、小悪魔的色気、圧倒的倒錯感、若干のワイルド感。

混ざつてる！ いい感じに混ざつてる。

妖しい男になつてる！ やべえ。誰も近付けない気がする。

金髪にちょび髭、ダークブルーの瞳。

アニメから飛び出た俺！



「俺……ヤバくね。彼女できるより前に俺が襲われそう」

うはー。希望の顔だ。俺もう今のこの気持ちで死んでもいい。

いやいや、せつかくイケメンになれたのだから、生きる!!

そう思い直して、ついでにスキルを確認だ。

名前：無名（元：一ノ瀬成） 種族：人族 年齢：二十二歳

◆スキル 言語理解 無限収納 身体能力向上

魔法習得 創造魔法 鍊金術 転移 鑑定 MAP

◆ユニークスキル 特定の品物お取り寄せ

スマホ タブレット バイク 銃器扱い

◆加護 ティアランシアの憐憫

ドリアスのお願い

なんか若干……若干どころではないくらい、気になるところはあるけど、まず俺は今、名無しなのか。

……成つて、なかなか正しく呼んでもらえなかつたから変えたい。この機会に、本来の自分とはまったく別の人間になりたい。

でもまつたく新しい名前になると、自分が呼ばれると気付けなくなりそうだから……
昔、ゲームの時に使つていたハンドルネームにしよう。

ジエイル。

いいかも。今の顔に似合いそうだし。

さて、名前を決めたことだし、新しい人生の第一歩を踏み出しますよ。

手始めに……〈お取り寄せ〉でタバコを買おう。

女神へお礼を贈るために、とりあえず買い物はしたんだけど、自分好みのものは、まだ買つていないんだ。

スマホには、〈無限収納〉と〈お取り寄せ〉、音楽と画像データのアイコンが。
ゲームとかは消えてるのか。

〈お取り寄せ〉を開くと、コンビニっぽいラインナップ。タバコと酒の画像が出てきた。
酒とタバコの品揃えはものすごいのに、食べ物が少ない。そこはまあ、仕方ないかな。
調味料はそれなりに揃つてゐたみたいなのでよかつた。

……念願のタバコ。

日本のも海外のも、廃盤品まで、いっぱいあるぞ。すごい！

悩む。何がいいかな。

異世界の世界観に合いそうな葉巻にすべきか。

でも、まずは、普通のタバコが吸いたいかな。

葉巻は落ち着いた場所で吸いたいから、また今度だ。

スマホをスクロールしていると、禁煙前に吸っていた懐かしいパッケージのタバコが目についたので、ワンカートン買った。一箱を胸ポケットに、残りは〈無限収納〉に入れた。

ついでに、マッチと携帯灰皿も購入した。

「ふー」

これこれ。この一口目が、たまらんのよ。

口に広がる、濃厚で刺激的な味とほんのり甘い香り。自分の身を包む煙さえも懐かしくて、思わず涙がこぼれそうだ。

咥えタバコで、街道に出ようとして、気付いた。

旅人を装っているので、一応荷物を持つてないとまずいか、と。

大きめな肩掛けでいいか。〈創造魔法〉で黒い革の鞄を作つて、多少は物が入つてそうな膨らみをもたせる。

岩陰から出て少し歩くと、馬車の列の後ろについた。

話しかけやすそうな人に町の入り方とか教えてもらおうかと周りを見る。

「……」

行商人らしきオジサンたちに、話しかけてみようと近付くと、めっちゃ目を背けられて足早に行ってしまう。そんな態度を取られたら、尻込みして話しかけることができない。

そんな彼らの格好は、オーガニック系つていうのか？ 麻っぽい布でゆつたりした衣装だ。俺は控えめなつもりのファンタジー衣装。やつちまつた感じなのか？

俺は動揺を隠したつもりでタバコを吸う。

「ふー」

岩陰に戻つて着替えるのもなんだし、このまま、道なりに人の流れについていくしかないか。どう考えても、遠巻きにされている気がする。

女神も何も言わなかつたし、それなりの格好になつてゐるはずなのに。

あ、もしかして俺がすつごいイケメンすぎるから、近寄り難い可能性が？

……違うか。自意識過剰になつちやう。だつて、顔がいいから。

「よーよー、オニイチャン？ いいもん吸つてんのなあ？」

話を聞けそうにないので、タバコを吹かしながら、ぼんやり歩いていたら、ガラが悪そうな三人

組に絡まれた。

「それそれ、なんかお高そうな香りがしてるなあ？」

どうやら俺の咥えているタバコが、気になつてゐるようだ。

「……タバコが欲しい時のお作法は一本ください、だろうが？」

ガラの悪さに、ムツとして返した俺に、三人はヤンキーみたいなメンチをきつてきた。

「アアン？」

「一本？ 一本だけか!?」

なんだと！ ツレでもないのに一本だってあげるのは優しいだろうが！

現在のタバコ一箱は、俺が若いころに吸つてた時のほぼ倍の値段だぞ！
お小遣い制のお父さんが泣いちやう五百円超えなんだぞ。

「一本もやる筋合いはねえぞ。いやならやらん」

女神になら、ワンカートンだがな！

「ふー」

なんかイラつとしたので、俺よりデカい三人を見上げて、タバコの煙を吹きかける。

煙だけなら楽しませてやろう。健康によくない副流煙だがな。

「おい。頬むから売つてくれ」

あれ？ 奪いに来ないのか。

悪そうなやつらが、必死な顔でねだつてくる。そこまで欲しいならいいかな？

「二十本、銀貨五枚」

「は？」

あれ、適当に言ってみたものの銀貨一枚つていくらの価値だ？ 千円か？ ぼつたくり価格？

銅貨つて、言いなおす？

通貨の基準を聞くの、忘れてた。

「そんな安くいいのかー!!」
「ウオー、すっげえ。気前いいな。オニイチャン」
あ、安いの？ 結局銀貨の価値がわからないぞ。
「俺にも二十本！」

「俺も」

「三人とも一箱ずつのお買い上げ。

手渡すとすぐに、大きくて太い指でケースの紙を大雑把に破いて、出した一本を無造作に咥える。

コイツら、火はあるのかなつと思つて見ていると……

三人の中では一番細身な男が「ファイア」と呟き、他の二人のタバコにも同時に火がつく。
魔法か。初めて見た。すごい!!

一口吸つて、目を丸くして、震えて喜ぶガラの悪い三人と、不本意ながら怪しいらしい俺。
近くにいた馬車の連中、逃げるよう先に行つちやつたじやないか。

「うめえ！ なんじやこりや」

「こんなうめえクサがあるなんてなあ」

そうかよ。この世界のタバコも吸つてみたいが、どこで買えるんだ。

ん？ 今、クサつて言つた？

「お前、こんないいクサつて言ってくれて、いいやつだな！」

やつぱりクサつて言つてる。ここではタバコのことをクサつて言うのか？

しつかし、ぱつぱつと価格のタバコでいいやつ認定。チヨロいのか。

「そんでオニイチヤン、こんな田舎に何しに来たんだ」

あ、ここは田舎なんだ。

「んー、気ままに旅をしている」

異世界から転生してきたとは言えないでの、微妙な返事をした。

「はあ？」

「お前どつかのボンボンか？」

「護衛は？ なんで一人なんだ」

あれ。俺つてお金持ちっぽいのか？

「……一人旅だけ？」

「マジかよ、それなら俺らについてこい」

なぜかコイツらに気に入られたようで、そのままついていつてみることにした。

「あ、忘れてた。俺たちは〈鋼鉄の拳〉っていう冒険者パーティだ。この町を拠点にしている。俺はリーダーで拳士のランガ」

「俺は斥候のヤン」

「俺は盾士のヴァロ」

第一冒険者パーティ発見!!

ランガは拳士。剛腕で、全身筋肉に覆われたデカいオッサン。ヤンは斥候で弓使い、少し細身で

チャラい雰囲気。ヴァロは盾士……ランガよりデカい、陽気なオッサンといった感じだ。

「俺はジエイル。冒険者になりたいと思っている」

そうそう、女神に身分証作つてもらえばよかつたのに、忘れてたんだ。

「は？ お前いくつだ。今さら冒険者になるのか？」

「え、一人で旅してきたのに、冒険者じゃないのか!?」

あちゃー。早速、設定がパンクしたっぽいぞ。

「いやー、なんとなく来れた？」

「ここは適当なことを言うしかない。」

「お前めちゃくちゃだな！」

「なんとなくで生きてるのか！」

「すげえな！」

何が面白いのか、三人に爆笑された。

三人についていき町の門までやつてきた。前に並んでいた馬車や商人、冒険者らしき人たちが順に門に入していく。

しばらくして、やつと俺たちの順番になつた。

「お、今帰りか？」

門番らしきオジサンが、ランガたちに声をかける。

「おう、ワイド、おつかれー」

三人が冒險者タグを見せ、簡単な確認が終わる。次は俺の番だ。

「ん、お前さんは初めましてだな。身分証を」

「何も持つてない」

「「「ハア!?」」」

ランガと門番。四人の声が重なる。まあそななるよな。でも、ないものはない。

「創造魔法」で作るのは、多分まずいよな?」

「入れないか?」

「……いや、これに触つてくれ」

困惑顔の門番に差し出されたのは、水晶玉らしきもの。アニメで見たことがある。

俺が触れると、水晶玉はピカーッと白く光つた。

「へえ、犯罪歴なし。少しも濁りがないのはめずらしいな」

嘘をついていたり、浮気の過去があつたりするとほんのり濁りが出るらしい。

高性能嘘発見器!!

「はあーん? まつさらか?」

門番のワイドめ! 大きな声でなんてことを言うんだよ。

「恋人でもいれば大なり小なり、イザコザがあるもんよ」

そんなイザコザ程度で水晶玉濁つちやうの!? ともかく、まつたく濁つてないから、童貞がバレたらしい。

致してしまつたらわずかに濁るつてことなの? どういうこつちや!!

「お前、そんな綺麗な顔で何もねえのか?」

やめて! 憐れまわいで!

「美形すぎるとダメつてかー?」

「かーわいそー」

コイツら……いつかコロス。

「オネエチャンとこ行くかあ? 奢るぞ」

「いらないよ!」

なぜ大事に取つておいた(わけでもないけど)のを、お金払つて捨てるのさ。

「お前、女に幻想持つてんのか? 適当にやつとけよー」

うわーん! 強者の笑み!! 嫌味?

ちなみに、小銭泥棒くらいでも薄く反応するらしい。俺にはなんの反応も出なかつたのは、どうなのだろう。

さすがに前世では、小さい悪さくらいはしたことがあるので、この水晶玉はインチキじゃないのか?

神様のサービスで、小さな罪はリセットされたとか……どうだろう。

結局、俺には犯罪歴がないということで、入場税として銀貨八枚を支払うことで、入れてもらえた。

「カナンにようこと」

門番のワインドはニットと笑つて、門を通してくれた。

ここはカナンっていう町の東の門だそうだ。

身分証を作つてからここに見せに来れば、銀貨五枚が返つてくると説明をされた。

「ほれ、ギルドに連れていくつてやるから」

ランガたちに髪をワシャワシャとかき回され、肩を組まれたまま町の中を進んで、町の様子を見る余裕もなく、ウエスタンっぽい造りの建物に連れ込まれた。

俺はランガたちに受付まで案内された。

「よう！ プティちゃん、このオニイチャンを新規登録してやつてくれ」

ランガがプティちゃんと呼んだ相手は、なんていうのか……ウサギだつた。

可愛いワンピースを着た、子供のような背丈の二足歩行の茶色いウサギ。

「こらあ！ オッサンたち！ 若い子をイジメでないでしようね！」

「いじめてねえよ！」

いくらか言葉を交わした後、ランガたちは「またな」と言つて、ギルドを出ていった。
「連れてきたなら、最後まで付き合いなさいよねえ」

呆れたように話すウサギさん。話すとマズルとヒゲが、モヒモヒと動いてかわいい。

「あら？ お兄さん、獣人を見るの初めて？」

じつと見すぎてしまつたのか、ウサギさんは首を横に傾げて、クスッと笑つた。

「……多分」

「そうなのねえ。私はプティ、よろしくね。登録はこれに……自分で書ける？」

はう、手がかわいい。ふわふわした手が俺の視線を釘付けに……いや、今は話に集中だ。

ウサギさん改めプティさんが出してくれた紙を確認する。

「書ける」

俺はプティさんのふくふくしている手をもふりたい衝動を抑えて、紙に必要事項を書き込んでいく。

名前、出身地、年齢、職業……

出身地……フナバシ……は、ダメか。

職業は魔法使い？ は……なんかいやだな。なんとなく。

うんうんと唸つてたら、プティさんが、「そこは得意な武器か魔法でいいのよ」と、教えてくれた。

自分が何が得意かは今はわからないけれど、銃つて書くのはダメなことはわかる。
剣つて書いておこうかな。

一通り記入してプティさんに紙を渡す。

「フニャビヤシイ？　どこかしら。聞いたことがないわ。遠いのかしら？」

一瞬、果物の妖精が飛んでいったような気がする。嘘を言うとあの水晶玉でバレるらしいので、出身地を実家のある市名にしたんだ。

「ソウデスネ。とても遠くて、かなり田舎、かな？」

田舎って言つておいた方が無難だよな。この世界には存在しないのだし。

「剣が使えるのね。でも剣は持つてないみたいね？」

『ティさんに、クスクスッと笑われて気付く。

「あ、今は短剣しか持つてない」

これから買いに行く予定と伝えて、剣士つて書いておいた。

「うん、嘘はないいいかな。これに一滴、血をくださいな」

大きめな消しゴムサイズのタグと針を目の前に出された。

これ、痛いやつ。注射嫌いなのに……

仕方ないと覚悟を決めて、針を指に刺して、タグに血を付けて、登録完了。

「スキルや情報は人に見せちゃダメよ」

「はい」

「まずはFランクから。一月仕事をしないで、ギルドに顔も出していない場合は、登録解除になるから気を付けてね」

『ティさんは、機械にタグを置いてから、俺に渡してくれた。

俺、冒険者になつたどー。

「他に質問とかある？」

冒険者になつたばかりの新人である俺は、どんな依頼を受けられるのか聞いてみた。
薬草採取や町の掃除、町の住人の手伝いが基本だと教えてくれた。

掃除や手伝いは子供向きらしいので、薬草採取を二件やることにした。

「それから、いい宿を教えてほしい」

寝床を先に確保しようと思つて、聞いてみる。

『ティさんは、ギルドの近くの〈小鳥の止まり木〉という、かわいい名前の宿を紹介してくれた。
「何かあつたら、また聞きに来てね」

もふもふな『ティさんにお礼を言つて、ギルドを出るときに改めて周りを見た。

そこそこ広さの屋内に、受付三人。食事ブースにはコツクらしきオッサンと、給仕のおばさん。
そこで、買取カウンターには居眠りしているオッサン。ちょっとした備品を売つてるらしい売店
にもオッサンがいる。

オッサン率が高すぎないか？

ギルドを後にして通りに出ると、町の人とたくさんすれ違つたけど、やっぱりどこか遠巻きだ。
俺の何がダメなのさ？
ちょっとしょんぼりな気持ちで、教えてもらった宿を目指すと、すぐに見つかった。

目的の宿は、〈小鳥の止まり木〉という名のとおり、ほのぼのとした建物だった。

俺が入つたら、怒られたりしない？

「すみませーん」

「はーい」

扉を開けて声をかけると、奥からエプロン姿のふくよかなおばちゃんが出てきた。

「あんれー、めんこい坊やでねの！ なんか用かね？」

「あの、しばらく泊まりたいんですけど」

「おんやー。珍しかね！ よかよー！ 何日お泊まりかね」

「めっちゃ訛つてるけど、どこの人かね。

「一泊素泊まりで銀貨四枚、食事付きなら一泊二食で銀貨五枚よー」

なるほど、宿の価格から推測するに、銀貨は一枚千円って感じか？

「とりあえず十日ほど？ 食事付きで」

「まあ！ んだば金貨五枚ね。お部屋は一階の角部屋にしてあげるけ」

階段を上がって、右の奥の部屋を使えと、説明を受けた。

「夕食は夜六時から九時まで食堂で、朝食は朝五時から八時までやけねー」

ギルドで聞いたのだが、この世界の時間も一日は二十四時間で、一時間は六十分らしい。地球の時間と変わらないのでわかりやすい。

鍵だという木の板（昔の銭湯のロッカーの鍵みたいだ）を受け取つて、二階に上がり、部屋に

入つた。

家具やリネンがカントリー風の、ほつこりしたとてもかわいらしい部屋だった。

ベッドカバーがパツチワーチ？ というか、継ぎはぎかな。

なんだかこの部屋の中に俺がいるのはどうなんだ。ファンシーな部屋に俺つて、異物感が半端ない気がする。

まあ寝るだけならどこでも寝れるから……うーむ。可愛すぎて困るのは初めてかも。

落ち着く場所に来られたことだし、〈無限収納〉に入つてている俺の財産でもチェックするかな。

……いや、チェックするのは、寝る前でいいか。

まずは物価と、どんな物が売つているのかを調べたいな。

あれこれ考えながら、タバコを取り出す。

あれ？ ……この可愛らしい部屋をタバコ臭くしていいものか？

よくないよなあ。困つた。

薄汚れた宿を紹介してもらえばよかつたかも。町を見て回りながら、外で吸うか。

歩きタバコはダメじやないよな？

一階に下りて、「買い物してきます」とおばちゃんに鍵を預けて、宿を出る。

今は午後三時を過ぎた頃だ。

人が少ないので、タバコを咥えて歩く。

「ふー」

なんだかんだ好きに吸えないのは、染み付いた日本人のサガか。

嫌煙、禁煙っ！ てな。スマーカーはマジ嫌われすぎだつたから。
少し歩けば、活気のある屋台が並んでる場所を見ついた。

「おー、美形の兄さん！ ソーセージいらんかね」

声をかけてくれたのは、ソーセージを売ってるお兄さん。フランクフルトみたいなサイズで銅貨一枚。たぶん二百円かな。

美形って言つてくれたから買おう。

「んー、これ吸い終わるまで待つてくれる？」

「よかよー。それ変わつたクサやね？ 高級品と？」

やつぱりクサ。タバコは一般的にクサという名称なのか。

「わからない。これは貰いものだから、普通のタ……クサを買いたいんだけど、どこに売つてるか知つてる？」

嘘をついてしまつた。でもタバコの入手先を言うわけにもいかない。

「クサは薬屋やろね。そんなよさそうなもの吸つてても、薬屋のを吸いたいとね？ 薬屋で見てガッカリしないかね？」

マジか。どんなタバコが売つてるんだ。微妙な顔をされたぞ。

吸い殻を携帯灰皿に入れてから、竹串に刺さつたソーセージを受け取る。
あ、これつて、この世界に来て初めての食べ物か。

で、

「どうかね？ うまいでしょ」

うん。つなぎがほとんど入つていない、肉肉しい味だ。にくにく

もしかして香辛料は高いのかな。胡椒こしょうも使つてないっぽいぞ。

「うん、しつかりした味だな」

冷えたビールが欲しくなる。

屋台の天井から葉っぱをぶら下げているので、なぜかと聞いたら、持ち帰りの包み用だというの

で、追加で五本買つた。

「ありがとう！」

お兄さんは一本おまけしてくれた。

また来てねと言う、愛想のいいお兄さんと別れて、他の店を覗いて歩く。

しばらく大通りをぶらついてみたけれど、酒屋以外、興味が持てそうなお店がない。
屋台通りを抜け、少し奥まつた路地に入ると、薬屋と魔道具屋を見つめた。

魔道具屋はクローズだ。残念。

まずはこの世界のタバコをゲットだ。薬屋に入ることにした。

扉を開けると、懐かしい婆ちゃんの部屋の匂いみたいな、線香と着物の防虫剤と軟膏なんこうが入り混じつた香りが鼻を直撃した。

薬草、生薬しょうやく、ハーブかな。いろいろ混ざつた匂いは、ちょっとキツイ。
「……らつしやい。何が欲しいかね」

小さい婆さんが、奥の部屋から出てきた。

「虫除けとかある?」

まずは、無難なものから聞いてみる。

「あるよ」

「といえば、ファンタジーならではの、憧れのアイテムもあるかな。

「ポーションは、置いてる?」

「ここは薬屋だよ。あるさ」

「そうだよね!」

「ただし下級だよ。中級もあるが、全部ギルドに出しているからね」
この田舎町では、中級以上のポーションはお高くて、一般には買い手がないから置いてないそうだ。

ポーションには、消費期限があるから、小さな店には置いておけないんだってさ。

ちなみに冒險者ギルドには、上級ポーションが保管されているそうだ。見てみたいものだ。

せつかくなので、下級の体力回復、魔力回復を五本ずつ、毒消しを三本買うことに。

俺、多分、鍊金術で作れるし、必要もないだろうけど、なんか欲しいじやん。

……瓶はあるゲームみたいなデザイン性はなく、ごく普通の試験管のようなものだつた。ロマンがないぞ。

「あとク、クサが欲しいんだけど……」

「はあん? 刻みか? 噛みか? 葉巻か?」

そう言つて婆さんが棚から出してくれたのは、刻みタバコと、噛みタバコと、太い葉巻だつた。見た目は、地球で売つているものと大差ないようだ。

刻みは、乾燥したクサを刻んだ物、噛みは、発酵中のクサと辛い粒を食べられる葉で包んだ物、葉巻は、クサとハーブや香辛料をブレンドしたものを乾燥させた葉で巻いた物だと、ざつくりと説明を受けた。ちなみにクサは、地球でいうところのタバコ草で、この世界では、鎮静効果や興奮作用のある薬草の分類らしい。地球とあまり違ひはないかも。

んー、噛みタバコは、俺的にはニコチン中毒の末期用だと思つて。偏見すぎか。俺にはまだ早い。

「葉巻と刻みで」

箱から出して見せてくれた刻みタバコは、刻み加減がかなり粗いものだつた。

ふむー。

量り売りだつたので百グラムにした。こつちはグラムはアムつて言つらしい。単位の名前は違えど、重さはだいたい同じみたいだ。

百アムで銀貨四枚。

葉巻は一本で金貨一枚。金貨一枚は日本円で一万くらいっぽいので、一本だけ。この値段にはを十枚くれた。

葉巻は一本で金貨一枚。金貨一枚は日本円で一万くらいっぽいので、一本だけ。この値段には

ちょっとビビったぜ。

「葉巻なんざお金持ちの吸うものだよ」

「だろうね。さすがに一本一万円は高いと思うよ。

「ちょっと吸つてみたかっただけ」

「そうかね」

ばあさんがなんか気の毒な男を見る目で俺を見てくる。でも、俺は気にしないぞ。あれだ。今の俺は、イキがつて強い酒とか、カッコいいタバコを買う、ヤンチャな自分に酔いしている状態。

人目なんかどうでもいいのだ。

「じゃ、ありがとさん」

「はいはい。またどうぞ」

欲しいものを買ったので、お礼を言って店を出た。

…しかし刻みタバコ。葉っぱ巻いたら葉巻じゃね？ 違う？

店を出てすぐに、ポケットからタバコを出して、一本。

「ふー」

今買った刻みタバコは、葉っぱを巻く場所がないので、後でゆっくり試そう。宿の部屋じやなんか吸う気になれないから、どうしようかな。

宿に戻る道を歩きながら、屋台なんかを覗いて、物の値段を改めて確認してみる。食料は日本の

物価と似た感じか、少し安いくらい？

食料に比べたら、葉やタバコはちょっと割高だつたかな。

本屋っぽいものはなかつた。この世界のことを学ぶには、どうしたらしいのか。

気づけば夕方の五時過ぎ、冒険者ギルドの周りに人が集まつてた。冒険者たちが帰つてくる時間なのか。

それぞれ、防具や盾、剣、杖を持つてるのが見える。まさにファンタジーだ。

女冒険者、ビキニアーマーじゃなかつた。露出は少なめだ。残念。

リアルは、防具もばつちり、しつかり防衛ができる服装をしている。そりやそうだ。

ギャルみたいな格好の美少女なんて、いるわけがない。

ゴリゴリマッショなオッサンだけ上半身を晒^{さら}して^る。誰得なんだ。素肌に胸当てみたいなのと肩

当てはつけてるけど。

男の盛り上がつた胸筋を見せつけられてもな……

「小鳥の止まり木」に戻ると、おばちゃんがお出迎えてくれて、鍵を渡してくれた。

「おかえりい」

「ただいま」

なんだか気持ちがほっこりするなあと思つていたら、奥からゴリラくらいの大きなオッサンが出てきた。

「ああ、紹介しようねえ、旦那のボルクだよー」

「俺はジエイル。しばらく世話になります」

初対面なので敬語で挨拶をしつつも、ポカーンと見上げちゃつた。ゴリラ（失礼）が「小鳥の止まり木」にいるつて！

この建物や家具、備品はおばちゃんの好みなのかも。そう思っておこう。

おばちゃんの名前は、エンマだつて。

「ご飯は六時だから、先にお湯を出そうかね？」

「お湯？」

お茶じやないのかと思つて聞いたら、部屋で身体を拭く用らしい。

ここ、風呂がないのかな……

「お湯、お願いします」

「あいよう」

木製の洗面桶おけを二階の部屋まで運んでくれるつて言うのだけど、女性に力仕事させるのは悪いと思つて自分で運ぶと申し出た。すると、「あんれえ！ 私を女の子扱いしてくれのかねえ！」と、バンバンと背中を叩かれた。

「あたしはめんこい坊やよりは力持ちとお！ でもせつかくだからお願いしようかね！」

エンマさん、めっちゃご機嫌だ。

俺、実の姉妹にも、アンナにも、荷物持ちをさせられてたし、普通なことだと思つてたよ。

アンナは、料理が苦手なのを誤魔化すためなのか、フライパンも重いのとか言つてたなあ……あ、なんか目から汁が出そう。

用意してもらった桶を抱えて、部屋に戻る。

ふむ。共用の風呂もトイレも二階にはない。部屋の中も、やはり風呂もトイレもない。どんなに忙しくても、湯船には毎日入つてたし、休みにはスーパー銭湯せんとう、サウナも行つてたから、全く入れないのは嫌だな。

とはいえ、ないものはないので、手拭いでザッと顔と身体を拭いた。

俺、今まで水を贅沢ぜいたくに使つてたんだなあ。

桶一杯で全身洗うのは大変だ。

一日中着ていた服を洗わずにまた着るのも嫌なので、〈創造魔法〉で夜に着て過ごすための部屋着を作つた。

下着は黒のボクサー。ついでにサンダルも。

暇な時に着替えの下着と服をいっぱい作らないとだ。

さて、飯が六時では早すぎるので、七時に下に行くことにして、スマホを触る。

ステータスとか、魔法の使い方とか、スマホやタブレットで見られるようにしてもらったんだ。とりあえず魔法で洗濯とか除菌とか消臭ができるのか調べてみた。生活魔法ができるらしい。よかつた。

早速、魔法を使えるようにした。

「<クリーン>」

小声で呟いたら、身体から髪、口の中まで「サアー」と洗われた感じで、爽やかな気持ちになつた。

めっちゃ便利ー!!

部屋着は新品だから洗う必要はなかつたけれど、生地がふわつとしたので、一緒に洗えてよかつた。

そのままスマホをスクロールしていたら、特殊スキルの項目に「ルーム」つて出てきた。

「ルーム」つて？ 部屋？ タップして、詳細を見たら。

【ルーム】……【無限収納】内部に設置。【ルーム】と唱えれば入れる】

ふおう!!

家まで【無限収納】に入つてたぜ。

株の儲けで買った、職場に近いマンション。

でも、二十七階の一区画だぞ？ 向こうで俺の部屋の部分だけ消えてるのか？

ま、神がしたことだし、うまいこと処理してあるだろ。

家まで入れてくれるなら、秘蔵の酒もマウンテンバイクもあるかなあ。

あ！ 風呂もあるし、もしかしてトイレも使える？

やつたーーー！

テンション上げ上げの俺は、【無限収納】の中身を確認した。

実家のトラクターとコンバインと、実家に預けていた漫画やプラモとかまで入つてた。つて、親父たち、トラクター使えんくなつたの！？ 可哀想だぞ。

俺が買って保険付けてたから、俺の財産なのか？ プレゼントしたやつなのに。

多分、事故の相手からの賠償金と俺がかけてた生命保険も入るだろうから、それでトラクターでもなんでも買つてくれるといいな。

会社の退職金も出るだろうし、それなりの金額が両親の手に渡るのではなかろうか。

アンナとは籍を入れる前だつたので、保険の受け取り先是書き換えてないし、親にいくだろ。アンナの親と兄妹も、ちよつとヤバそうな香りがしていたから、入籍を済ませていたら泥沼じごうぬまだつた。

ごめんよ。親父。おかん。俺ちよつとバカになつてたんだ。

……あれ？ 受け取る前の保険金とかは、俺じゃなくて親に行くよな？

ん？ 全財産こつちに収納つて言つてたな。もしかして両親に何も残せていないのか？

ちなみに今の所持金は数億円分はある。株を現金化した金額かも。

働いて貯めた預金自体は、アンナの散財でほぼ……ハハハ。

しかも、俺の2LDKマンション（一応都内）は、部屋数足らないとか、立地が気に入らないとか、家具が全部ダサいとか言わされて、新婚旅行から帰つてきたら物件を探す予定だつた。